

粟島

稲宮 健一

新潟市で教員を務めていた二十年も前、粟島に一泊旅行で行ったことがある。二月二八日の読売新聞によると、この島が国境離島支援になっていると報じられた。県の北にある荒船港からフェリーで一時間半ほどの所にある。東西四・四km、南北六・一km、人口三七〇人（一〇年前）、今や小さな過疎の村である。

家内の近所づきあいのお仲間、総勢三〇人程で一泊旅行に出かけた。地の人達が殆どで、村仲間という一団であった。港を出ると、昨夜仕込んだばかりの地元の味の披露が始まった。山菜の揚げもの、漬物、など、今でも忘れられないのが、ぜんまいの一品である。何しろ、柔らかく芯まで戻し、独特の味付け、その味たるや、これぞ地元の味を頂戴した。少し腹ごしらえが済んだ後、フェリーは港に接岸した。秋晴れの快い日だった。

ピックニック・スタイルに軽いリュックを背負い、島を一周する歩きが始まった。目の前は青い空と、それを写す大海原である。島の中は雑木林が生え茂っている自然の緑地で、海を見ながら雑談をし、軽い汗をかけた。今夜の宿は漁村の集会所のような大広間が宿である。民宿のように個別の部屋ではないが、それもまた楽しである。風呂でさっぱりした後、夕食の時間だ。宿の主人であり、鮎を握る素晴らしい料理人でもあり、海でとれたての、八〇cmぐらいのヒラメが二匹と、炊き立てのすし飯が用意され、その場で握られる新鮮の上のない鮎の味は、どんな店構えの高級すし店よりリラックスし、満腹にさせてくれた。お皿を出せば、その場でお代わり、まるでわんこそばのようにヒラメの鮎のにぎりであった。

そこが今、総人口四〇〇人足らずの過疎の島になっている。やはり、豪雪期の今は閑ざされ孤島になっているのかな。瀬戸内の豊島（てしま）は一時産業廃棄物集積のゴミ島であったが、今や改め「芸術の島」になっている。お金持ち東京都が、金と、知恵を出し、よいリゾート地にかえる協力はできないだろうか。